
献 辞

三 神 和 子

(英文学科長)

新見肇子先生といえは、だれでも英詩の先生としてのお姿を思い浮かべるでしょう。1989年に本学英文学科に着任以来、先生はずっと水曜日5時限目の英詩の授業を担当され、卒論で詩を論じたい者は新見先生のゼミに入りました。大学に入学して先生の英詩のご解説を聞き、思わず英詩の魅力にひきつけられたという学生も多いのではないのでしょうか。先生のもとで卒論を書いた学生は、先生のご指導や英語の添削に感謝しながら、社会に飛びたっていました。大学院でも先生は英詩を担当され、先生のゼミや授業から詩を研究する将来の学者が育っていました。先生は学生を甘やかすことなく厳しくご指導されるのですが、ほんとうに学生の面倒見がよく、多くの学生は先生のお気持ちをくみ取り、先生のもとで一生懸命勉強しました。先生のご指導ぶりを拝見して、教育の厳しさ、難しさ、そして楽しさを見習おうとした若手の教員も少なくありません。

また、先生はご自分の研究に真剣に取り組むことによって、多くの同僚のよき手本となっておられました。先生はウィリアム・ブレイク及びウィリアム・バトラー・イェーツの研究者としてイギリス・ロマン派学会、日本イェーツ協会等の学会で活躍なされ、日本英文学会の評議員、イギリス・ロマン派学会の理事・学会誌編集委員をお勤めになりました。そしてお忙しいなか学会誌や紀要へ精力的に論文を発表され、*Blake's Dialogic Texts*、『シャーロット・スミス詩の世界——ミューズへの不満』等を上梓されました。

た。授業のあいまに私たちに、先生がご研究なさっている詩人のお話をされることがありましたが、その時の先生の目はとても輝いていて、先生がほんとうにご研究を楽しまれていることが解かり、感心したものです。

そして先生は日本女子大学の学務にも献身され、英文学科学科長、大学院英文学専攻主任、学生生活部長、生涯学習センター所長等を歴任されました。まさに大学のために骨惜しみすることなく働いてくださった23年間でした。

いつも頼りになり、学生や同僚のよき相談相手である新見肇子先生が大学を去られることは、学生ばかりでなく私たち教員にとりまして、大きな痛手としか言いようがありません。先生のご定年退職を残念に思いながら、先生への感謝とともに、先生のますますのご活躍、ご多幸、ご健康を祈念して、この『英米文学研究』をささげたいと思います。

大学を離れられても、今までと同様に英文学科を思い、よきご助言をいただければと思います。新見肇子先生、ほんとうにありがとうございました。
